



## 幼児と夏の戸外観察

堀 七 藏

「幼児は見る物につき、何でも「これはなあに？ あれなあに？」という質問を連発する。ことに、幼児を戸外に引率したときには、凡ての物、ことごとく珍らしく、好奇の眼をもつて、その事物を観察してその観念を得ると共に、その名称をまず、質問する。これに一々答えることは、自然科学者でも容易なことではない。それで、アメリカの自然研究の大家、コムストックは曾つて、次のようなことを言っている。「私にはわからない。いつしよによく見ましよう」と素直に答える人でないと本当の自然研究の教師ではないと。そこで、いろいろのことを幼児にきかれても、答えられないし、いろいろのことを幼児に教えることが出来ないから、幼児を戸外に

連れ出さないと教師や親達は、本当に幼児を教育する熱意が足りない」と断定せざるを得ない。

事物の名称を質問せられたならば、幸にその名称を知っているときには、答えてやるがよい。もし知らないときには、「サア何でしょうね」と受けて、幼児と共に、その植物でも、動物でも、観察するがよい。そして、「その色はどんなか」「形はどんなか」「足は何本あるか」「羽が何枚あるか」「どんなになつているか」など、幼児に尋ねながら、幼児をしてよく観察させると共に、自らも観察するようにせねばならない。かりそめにも、幼児にいろいろの知識を授けようなどと考えるはならない。したがつて、「何か」という疑問に次いで起る「どうしてか」という質問にも、答えようとしてはならない。幼児が自然物自然現象に対して直観し、幼児自ら直観

することをごきまで尊重せねばならない。科学知識などと称して安価な大人の知識を幼児に押付けるが如き態度を極力さげねばならない。

## 二

夏の戸外は幼児にとつて大げさなものではない。保育室を一步外に出れば立派な戸外である。二坪か三坪のお庭に出ても、戸外である。夏の「戸外」と夏の「野外」とを混同してはならない。幼稚園の庭でも、幼稚園の附近一軒以内の観察で、十分である。一步、室外に出ると、ありがたいし、かまきりがあるし、ちようやはちがとびまわつてきましょう。また、くもが巣をはつてきましょう。また、すずめもつばめも飛んでいるし、とんぼやせみもきましょう。あさがおやひるがおがさいており、はるしやきくやひまわりもさいていきましょう。或はなすやトマト、かぼちややじやがいも、さつまいもなどを作つてある畠があれば、この上もない。なお、幼稚園の近くに小川や小さな池があれば申分がない。小川にも池にも、水草がはえており、めだかやふな、どじょうなどがきましょう。またみずずましやげんごろう、たいごうち、やごなどもきましょう。いもりにかえる、おたまじやくしなどもきましょう。それらは、幼稚園の環境によつて、それぞれ、異なること勿論であるが、幼児の戸外観察

には、何でなければならぬという要求がない。それぞれの幼稚園の環境によつて、その幼児の周辺にある戸外を十分に活用することが戸外観察の真精神である。ソロモンの榮華も野に咲くゆりの花に及ばぬ。何でも幼児の視聴をひくものはいい観察の材料である。それであるべく幼児と共にその周辺にある自然の観察を毎日行うことが大切である。

## 三

夏の戸外は日射が強いから、幼児が日射病にかからない用意と、虫などにさされたときの手当が出来るような仕度をして、戸外観察に出かけねばならぬ。小学生の野外観察のときに必要な準備ほどでなくても、四十人の幼児を戸外につれ出すのであれば、室内の生活とは大に異なるところがあり、相当な心掛と用意を計画して、戸外観察を実施せねばならぬ。幼稚園の庭で遊ばせるときと異なり、幼稚園から一軒以内の戸外観察でも、即時に瘡機処置が出来るだけの心の準備と応急の手当の簡単な用意をせねばならぬ。一人の幼児に起つた事故の処理のために他の多くの幼児を放置するようにならないように、四十人の幼児を悉く目の中に置いて戸外観察をさせることが出来るようではならぬ。

そして戸外観察では、各幼児に心のつなをつけて、幼児の自由な

活動をさせるようにせねばならぬ。幼児が好奇心を抱くものを自由に観察させ、幼児各自が、その五官を仍かして感得し体験することを中心とし、教師からいろいろのことを教へようとしたり知識を授けようとしてはならない。例えばせみがないときには、「せみがどこにとまっているか」「せみはどんなにいないか」「どんなにとんでいくか」「どんなせみか」などの問を出す位にとどめる。そして、あぶらせみとみんなせみとひぐらしと、それぞれどんなにちがうか、せみが、さなぎで長い間の地中生活をなすことなどを、得意顔に幼児に教えるようなことは、禁物である。教師がいろいろのことを教えると却つて幼児の眞の観察を抑制する結果になるからである。戸外観察では、幼児の疑問に対して安価な解決を与えることなく、幼児と共に、観察する態度を持つことが肝要である。自然研究では、コムストツクの「私は知らない」という眞の精神に徹底せねばならない。

#### 四

戸外観察では、出来るだけ、幼児の自由な観察を尊重せねばならない。しかし、幼児は破壊本能が旺盛であり、残忍性に富むから、ありをふみつぶしたり、とんぼのはねをちぎつたり、また蒐集本能でいろいろの草花をちぎつたりする。是等の行動を真正面から抑制し

ようとするよりも、破壊本能や蒐集本能を満足させて、観察実験する態度を積極的に養成することが戸外観察の使命である。

それで、夏の戸外観察に於て、幼児にはなかなか出来ないが、とんぼとりでも、せみとりでも、またかなぶんを集めることでも、ちやうをとることでも、いろいろの採集をさせるがよい。そして、その捕えたものをくらべて見たり、標本にすることを手伝つてやるがよい。幼児の好むものを採集させることはよいことである。只はちにさされたり、くもにかまれたり、毒虫にさされたりしないように、また毒草や毒な実を口にしないように、注意せねばならぬ。

夏の戸外には、幼児の好むものが多いが、また幼児の好まないもの、幼児の恐れるものも少くない。幼児のいやがるみみずやいもり、また、幼児のおそれる毛虫やへびなどを、強いて観察せしめようとすることは宜しくない。尤も幼児が恐怖心を抱くものには、何等の理由のないものが多い。それで、こわいもの見たさで、はちにでもくもにでも、毛虫にでも、幼児は寄つて、それらをいじくりまわすようなことがある。そんな時には、強いて止めることなく気をつけて観察するように指導するがよい。しかし、とくにはちや毛虫に幼児がさされないように注意することは肝要である。

#### 五

夏の戸外では、幼児の自由な活動を尊重せねばならぬ。幼児が静かに観察することを要求しても駄目である。況んや全体の幼児に自然物や自然現象について一斉に説明するようなことを期待してはならぬ。しかし、戸外における自由な観察の活動をさせた後には、日かげのところで休ませ、「どんなことが面白かったか」「何を見たか」「どんなものをとったか」などについて、お話をさせてもよい。また、いろいろのことについての簡単な問答があつてもよい。しかしこれは重要なことではない。これは観察の整理という価値よりも、活動の後の休息である。幼児の戸外観察は整理しない方が寧ろ価値が大きい。戸外観察はどこまでも、幼児各自が五官を働かして、自然を直観するところに、その価値がある。自然に対する眼を開くのが戸外観察の精神であり、幼児各自が五官を十分働かして自然物や自然現象を直観するための戸外観察である。かりそめにも、教師の死んだ知識を以て幼児の自然に対する眼を蔽うようなことがあつてはならない。教師は幼児に対して、自然物や自然現象についての知識を授けよう。それが日常のやさしい科学教育であるなどと誤解してはならない。戸外観察によつて幼児の身辺の自然に対する理解と態度の芽生えを養うことに留意せねばならぬ。自然に対する眞の理解と態度の芽生えを養うことは、教師の説明による科学的知識の伝授によつて達成することが出来ない。戸外観察に於ては、教師は「私

は知らない。いつしよによく観ましょう」という態度に徹底することが最も望ましいのである。

(専修大学教授)

### 「幼児の教育」九月号の定価据置き

——日保学会に少しでも御協力したい——

「幼児の教育」九月号は、毎年日本保育学会の特集号と致し、大会の研究発表と記録を掲載致しておりますが、このため毎年この号は定頁五十二頁を相当超過し、増頁に伴う臨時定価をつけて参りましたが、今回第七回保育学会の未だ且つて見ない大規模な研究調査の御苦心を拝察し、これに鑑み、これが御苦心に少しでも御協力致したきため、本誌五十三巻九月号は、通常通り「五十円」として定価を据置きにいたします。

発行所 日本幼稚園協会  
発売所 フレーベル館

× × ×